

## 『和菓子のアン』(2010年)

坂木 司／著 光文社

きょうこ

杏子は高校を卒業したけれど、まだ進路の決まっていない十八歳。好きなことは、お菓子を食べること。そこでデパートの地下の和菓子店『みつ屋』のアルバイトとして働くことにしました。和菓子の世界は専門用語が多く、苦勞しますが、杏子は先輩たちに教えられながら、一生懸命働き続けます。個性的な店長や同僚たちとも少しずつ仲良くなり、『アン』とあだ名をつけられます。

いつも同じ色の服を着るお客様の秘密、専門用語を使って店員を試してくるお客様など、デパートの和菓子店の日常が面白く書かれています。



## 『ずっしり、あんこ』(2015年)

青木 玉／(他)著 杉田 淳子／編  
武藤 正人／編 河出書房新社

本書は、あんこをテーマにした、総勢39名のエッセイ集です。井上靖・内田百閒・幸田文・中村汀女など、著者はいずれも超有名なばかり。これだけの数の作家の本を全て読むのは大変ですが、この本で「名前だけは知っている。でも読んだことはないなあ。」という有名作家たちの文章を味見してみませんか？一編一編は短くても、中味はおまんじゅうにたっぷり入ったあんこのように、ずっしりしています。



## 『まるまるの毬』(2014年)

西條 奈加／著 講談社

親子三代で営む菓子舗「南星屋」。武士から転身した代わり種の店主、治兵衛。治兵衛は諸国を巡り、旅先の菓子屋で修業をしていた。江戸にもどるきっかけとなったのは、旅先で女房をなくしたからだ。そんな治兵衛が江戸ではめったに食べられない珍しい菓子を作るので、南星屋は開店前から客たちが列を作って待っている。

そんなある日、平穩な南星屋に南町奉行所の役人がやってきた。治兵衛の作った菓子について、肥前平戸藩より訴えが出たという。治兵衛は何を言う暇もなく、吟味方与力の取調べを受けることになった。



## 『春、戻る』(2014年)

瀬尾 まいこ／著 集英社

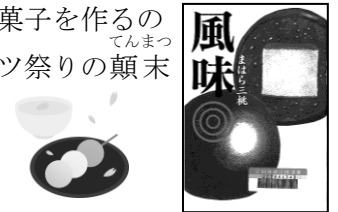
望月さくらは12年間つとめた会社を辞め、もうすぐ和菓子屋を営む山田さんと結婚する。ある日、あきらかに自分より若い青年が「お兄ちゃんだよ」と現れる。たしかに、さくらのことをよく知っている…。強引でマイペース、だけど憎めない「おにいさん」は山田さんとも親しくなり、さくらのくらしに溶け込んでいく。「おにいさん」の出現でさくらと山田さんの心の距離は縮まり、そして、さくらが閉ざしていたある記憶の扉が開いていく。



## 『風味さんじゅうまる』(2014年)

まはら 三桃／著 講談社

伊藤風味は老舗和菓子屋「一斗館」の娘で中学2年生。祖母は兄をイケメン上白糖、風味をクセのある黒砂糖に例えている。その頑固な性格が災いし、部活に顔を出せずにいたところ、長崎街道沿いのお菓子屋で企画された「SS-1スイーツ祭り」の話聞き、和菓子職人である父に新製品開発を提案する。開発途中で亡くなった祖父の思いも引き継いで、風味の名を冠した和菓子を作るのだ。部活の悩みやスイーツ祭りの顛末など、青春がぎゅっと詰まっています。



## 『甘いもんでもおひとつ 藍千堂菓子噺』(2013年)

田牧 大和 // 著 文藝春秋

三年前、晴太郎の父が鬼籍に入ってから一年たったある冬の日。いじわるな叔父のせいで実家の和菓子やである『百瀬屋』から追い出された晴太郎と二つ下の弟、幸次郎。昔、父のもとで働いていた茂市を頼り、茂市が持つ店『藍千堂』を譲り受ける。

先代の、晴太郎の父の味を守るため、町の人々においしい和菓子をお届けするため、二人は立ち上がる。

